
10号 北海道がんセンターたより

平成17年1月発行

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター

〒003-0804 札幌市白石区菊水4条2丁目3-54 TEL 011-811-9111

□ ホームページ <http://www.sap-cc.org>

編集発行人: 荻田 征美



北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。このため、

- 常に、医療の質と技術の向上を目指します。
- 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します。
- 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。

放射線科紹介



放射線診療部長 西尾 正道

一般に放射線科の業務は、放射線治療と画像診断に大別されます。当科でも各々専門の医師が診療にあたっています。

放射線治療は、手術・抗癌剤と共のがんの三大療法の一つとされ、現代のがん治療には必要不可欠なものです。全身各所の悪性腫瘍に対し、早期から進行期まで、根治治療から緩和医療まで、様々な状態の患者さんに放射線治療が行われています。放射線を身体に当てると言われて、恐ろしい印象を持つ方も多いと思いますが、上手く使用すれば副作用を最小限に抑えた治療が可能です。末期がん患者さんで放射線以外に治療法が無い、と判断されることもしばしばありますが、進行期のがん患者さんに対して行えることから御理解頂けるように、適切な使用方法により最も負担の少ない治療法と成ります。

放射線治療では臓器の温存が可能となるので、原発部位や進行度によっては他の治療法よりも後遺症が少なく完治が望めます。放射線治療と他の治療法各々の長所・短所を比べ、どちらが御自分により適切か考えて選択して下さい。

当院は、体外から病巣へ放射線を照射する直線加速器を3台有し、また体内から病巣へ限局して照射できる小線源治療機器も各種揃えています。充実した装備を適切に使い分けることで、状況に応じた治療が可能であり、放射線治療において当科は日本有

数の実績を誇ります。とはいえ各臓器の専門家と当科医師とで協力して治療にあたる事が必要であり、どちらが欠けても十分な治療が行えません。特に最近では放射線治療だけでなく、抗癌剤や手術と組み合わせた治療が増えており、紹介元の医師との連携がより重要となっています。双方の診察を受けながら治療を継続して下さい。

一方、画像診断の分野ではCTやMRIなどを診断専門の医師が読影して、各科担当医にレポートを渡しています。高度に進歩した現代の画像診断では、診断専門医の意見が必要不可欠です。患者さんと直接お会いすることは少ない分野ですが、診断結果だけでなく、撮像法の決定などでも縁の下の力持ちとして、患者さんのお役に立っています。また画像診断の技術を応用して、病巣に限局して抗癌剤を注入したり、治療器具を挿入することや、体内深部の病変を穿刺するなど、特殊な検査・治療も診断医の業務です。手技が多岐に渡るため、紙面では全てをお伝え出来ませんが、紹介された場合は担当医が説明いたします。

以上、簡単ですが放射線科の紹介とさせて頂きま。御不明な点は担当医まで遠慮無く御相談頂き、できるだけ不安を少なくして治療に臨んで下されば幸いです。

Contents もくじ

放射線科紹介	放射線診療部長 西尾 正道	1
市民公開講座「肺がんに効く、肺がんの話を聞く会」を開催して	呼吸器外科医長 近藤 啓史	2
新潟中越地震 災害医療班派遣に参加して	7F循環器・心臓血管外科病棟 副看護師長 菅原 学	3
大きなサンタが訪れた小児科病棟のクリスマス会	2F小児科・乳腺外科 川端 香	4

市民公開講座

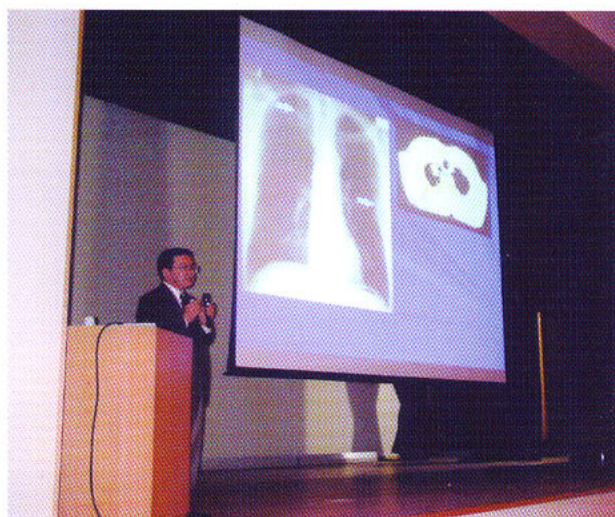
「肺がんに効く、肺がんの話聞く会」

を開催して

呼吸器外科医長 近藤 啓史

この会は昨年の北海道がん講演会（当院主催）の
おり、会場にこられた方の中でもう少し時間をかけ、
系統だった話をしてほしいという声より実現した会
です。春先より時期と場所を考えていましたが、札
幌以外の人にも集まりやすい JR 札幌駅と地下道で
交通している札幌エルプラザビル、札幌市男女共同
参画センターで11月14日（日）開催しました。折角
来ていただくのだから、肺がんを吹っ飛ばすような
話をとということで、表題のタイトルになったしだい
です。講演は第1部、「肺がんの診断と化学療法」
という題で、当院呼吸器科 磯部医長が講演をしま
した。肺がんは年々増加しており、毎年の胸部 X
線写真による検診が重要なこと。できれば CT を行
う検診が有効なこと、喫煙者には喀痰検査も同時
に行うことの重要性を強調されました。そして当
院での診療の実際について話をしたあと、後半は新
しい抗がん剤ができてきたこと、とくに新聞でもに
ぎわした「イレッサ」や「タキソテール」などの話
をしました。また医療連携室を使った他医にも診て
もらうセカンドオピニオン外来があることを話しま
した。第2部は私が担当して「胸腔鏡下手術」につ
いて講演をしました。肺がんの手術では30～50cm
切開しなければならなかった傷を当院では2cmの
穴より棒状のカメラを胸の中に入れ、他に4cmと3cm

の傷で手術ができること。その利点は侵襲が少ない
ことにより、1) 免疫力の低下を防げる、2) 翌日
には食事ができ、歩行ができる、3) 1週ぐらいで
退院が可能、4) 傷が小さいので痛みが少ない、5)
社会復帰が早いなどの話をしました。逆に欠点
はこの手技に精通していないと、大出血になつたり
時間がかかたり、危険性が伴う手術であることも
強調しました。また胸腔鏡下手術の実際を知って
もらうために2本の手術ビデオを見てもらいま
したが、会場のあちらこちらより「ウワー」とい
う驚きの声が起こっていました。講演後何人かの
患者さんより「大変驚きました。私もあんな
ように手術してもらったんですね。」と喜びの
声もいただいています。2部構成約2時間の講演
後、司会を務めた旭川医科大学第1内科講師の
大崎能伸先生を入れ3人で当院医療連携室に申
込まれた無料の医療相談も行いました。定員320
名の会場で立ち見までで参加者350名という
講演会は無事終了することができました。開催
した我々も関心の深さに正直びっくりしています。
あらためて主催・後援をいただいた大鵬薬品工
業（株）、北海道対がん協会、結核予防会北海
道支部、当院医療連携室ほか関係各位に深謝
いたします。来年も機会があれば、またこの
会を開催したいと思っています。



新潟中越地震 災害医療班派遣に参加して

平成16年11月16日～11月20日の5日間、当院の医師、看護師2名、薬剤師、事務官の5名で新潟県中越地震の災害医療活動に参加してきました。今回派遣されたのは震度7を記録した北魚沼郡川口町で、老人福祉施設の末広荘に対策本部が設置され、私達医療班と心のケアチーム、そして全国各地から保健師が30名前後集い、合同でミーティングを行いながら活動してきました。

私達が派遣されたのは、震災があって4週間が経過した時期で、電気にやっと上・下水道が復旧したばかりで、11月16日に一部地域を除き約1500世帯、5500人余の避難勧告が解除された状況でした。地震で倒壊してしまった多くの家屋とテント生活を送る人々、歪んでしまった道路に圧倒されましたが、支援物資を運ぶ沢山の大型トラックと住民を支援する自衛隊、警察、そしてボランティアの方々の復興に向けた熱意溢れるマンパワーに胸が熱くなる思いでした。

私達はカセットコンロでレトルト食品を撰

り寝袋生活をしながら医療活動を行ってきましたが、患者数は10月31日では1日270人であったのが、私達が訪れた頃には1日10名前後まで減少し、疾病も主に感冒や熱傷、外傷等の軽症の方々でした。医療ニーズの低下と個人病院や近隣の総合病院の医療体制も整備されてきたことから、医療班の撤退が予定されていました。

しかし、身体面でのケアはある程度充足されたかもしれませんが、「あの時を思い出すと眠れない。食欲がない。余震が心配でゆっくり風呂にも浸かれない」といった心理的ストレスを抱えたままにいる多くの方々の声を聞いてきました。被災者の不安・恐怖は計り知れないものがあると思います。PTSD（心的外傷）を含めて精神面のフォローがしばらく必要であることを実感してきました。心の傷が癒され安心して暮らせる復興が進むことを祈るばかりです。被災者の皆様には心からお見舞い申し上げます。



大きなサンタが訪れた 小児科病棟のクリスマス会

2階小児科・乳腺外科 川端 香

先月の12月16日大講堂で小児科病棟のクリスマス会が行われました。小児科における行事には単に楽しむだけでなく種々の意味があります。特にがんセンターの当院では長期療養を余儀なくされる子供たちにとって季節を感じる場であり、また、療育の機会でもあります。例年各年代でチーム分けし、出し物をしてもらうのですが今年は趣向をかえ、行事係が中心となってゲームを行いました。先生たちが頑張ったジェスチャーゲーム、お父さんの手が入るか心配された、箱の中身当てゲーム。小さい子供たちはもちろん、ちょっとそういうことが恥ずかしくなってきたお兄さん、お姉さん、昔子供だった乳腺の患者様たちも楽しんで下さったようです。

そして、入院している子供のお母さんがボランティアとしてパネルシアターをしてくださいました。ありがとうございました。そして、みんなが待っているサンタの登場！今年はちょっと函館訛りのあるサンタでしたが・・・「病院のサンタさんは大きかった」と後で話している子供もいました。来年も子供たちに少しでも入院生活の励みとなるような夢のあるクリスマス会にしたいと思います。協力して下さいましたみなさまありがとうございました。

